

復活節第二主日

2013.4.7

ヨハネ 20・19-31

先週の日曜日、私たちは復活祭を祝いました。私たちが祝った復活祭の喜び、私たちが信じる主の復活が私たちにもたらした喜びは、今、私たちの中で、どのようになっているのでしょうか。

今日の復活節第二主日のミサの中で、私たちは、ヨハネ福音書に記されている、二度にわたる復活された主の弟子たちへの訪れについて聴きました。イエスを十字架に追いやった人々を恐れて、戸口に鍵をかけて閉じこもっていた弟子たちの真ん中に立たれた主は、「あなた方に平和がるように」と呼びかけてくださいます。その時、彼らは自分たちの中に立って、そう言うてくださる主を見て喜んだのです。けれども、それから八日目に、再び復活の主をお迎えすることになった時にも、部屋には依然として鍵がかけられていたのです。

最初の主の訪れの時にその場に居合わせなかったトマスは、その閉ざされたままの部屋の中で、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、またこの手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」と言い張り続けたのでした。トマスの気持ちが分かるような気がします。トマスは他の誰よりも、頑なで、疑い深かったということではないと思います。他の皆が「私たちは主を見た」と言っているのに、自分はその場になかったという、とり残された疎外感がトマスをあのように頑なにしたとも考えられます。けれども、あの鍵のかかった、閉めきられたままの部屋の中で、「私たちは主を見た。」「私たちは復活された主とお会いした」と言っている人たちの言うことを、誰がそのまま信じる事が出来るのでしょうか。復活の主を喜びのうちに迎えたはずの弟子たちを包む空気は、その彼らが醸し出す雰囲気は、少しも変わっていませんでした。そのような仲間たちが言うことを、トマスでなくても誰が信じる事が出来るのでしょうか。

「あなた方に平和があるように。」これが、閉めきった部屋に鍵をかけて閉じこもっていた弟子たちに復活の主が呼びかけてくださった第一声です。この平和の挨拶をもたらすために、復活の主は、ご自分を十字架の上に見捨てたままにして、自分たちも同じ目に会うことを恐れて、鍵をかけて閉じこもっていた弟子たちのもとを訪れてくださったのです。最初の復活の主の訪れの時、弟子たちは自分たちの真中に立たれた主を見て喜んだと語られています。けれども、「あなた方に平和がるように」と呼びかけておられる、復活の主がもたらしてくださる平和が、あのトマスも含めて、弟子たち皆の心を満たすためには、二

度にわたる復活の主の訪れが必要だったのです。復活の主の訪れの喜びを知った後でも、弟子たちの状況は変わってはいなかったのです。弟子たちだけが集ったあの部屋には依然として鍵がかけられていたのです。その締めきられたままの部屋の中で、トマスは「自分は信じない。自分には信じられない。」と言い張っていたのです。復活の主の訪れを確かに経験したはずの弟子たちは、自分たちの仲間のトマスにさえ、彼らが経験した喜びを伝えることが出来なかったのです。そのような仲間同士顔を突き合わせながら、途方に暮れた弟子たちが集う澱みきった部屋の中に一週間の時が流れて行ったのです。そのような弟子たちのために、復活の主は次の週の初めの日にあらためて、彼らの真中に立ってくださるのです。そして、「この目で見、この手に触れなければ決して信じない」言い張っていたトマスの心をも開いてくださったのです。「私の主よ、わたしの神よ」トマスのこの信仰告白の叫びは、その場の皆の信仰告白となったのです。こうして弟子たちの皆が、「あなた方に平和があるように」と呼びかけておられる復活の主がもたらしてくださる平和に満たされたのです。

あの二度目の復活の主の訪れの時、弟子たちは皆、復活の主がトマスに向かって語りかけてくださったことばを聴き、その主に応えたトマスのことばを聴いたのでした。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」復活の主がトマスに語りかけられたこのことばを心のうちに思い巡らすうちに、弟子たちはあの最初の訪れの時の主のことばが意味していたことを悟ったのです。聖霊を受けなさいと言いながら、復活の主が自分たちに吹きかけてくださったあの息吹が、そのおことばどおり聖霊の息吹であることを悟ったのです。

復活の主が弟子たちの真中に立ってくださった時、彼らは、自分たちがその場から逃げ出した、あの十字架の傷跡を残す復活の主イエス・キリストのゆるしと平和を経験したのです。しかし、彼らがそのゆるしと平和に完全に満たされたのは、十字架上に死んで復活された主が、ご自分の神の子のいのちそのものである聖霊を弟子たちの中にも吹き入れてくださったからです。最初の人アダムが、創造主である神のいのちの息吹を吹き込まれることによって生きる者となったように、弟子たちは今や復活の主のいのちの息吹である聖霊を吹き込んでいただくことによって、彼ら自身のうちに復活を体験した者たちとされたのです。彼らは、復活の主の息吹を受けて、それまでの古い自分たちのあり方に死んで、新たないのちに生き始める新生を経験したのです。イエスの復活は、アダムの罪を引きずるこの世界に、イエスの復活によってもたらされた、そのような新しいいのちを生きる人々を生み出したのです。そして、弟子たち

の真中に立った主は、新たな復活のいのちに満たされたこの人々を世界に送り出してくださったのです。

彼らが復活の主に送り出されて、宣べ伝えたことは、彼ら自身が復活の主によって経験させられたことです。彼らは、自分たちが十字架の上に見捨てた、その手と足とわき腹にいまだにあの十字架の傷を残す復活の主が何事もなかったかのように、「あなた方に平和があるように」と呼びかけてくださったことの証人となったのです。その復活の主が与えてくださるゆるしと平和を信じて、身を委ねることができるなら、人は自分の過ちによる如何なる失敗と挫折を経験しても、そこから立ち上がる力を見出すことが出来るということを力強く宣べ伝える者たちとされたのです。それだけではなく、そのような復活の主の絶対的なゆるしを体験した者たちとして、彼らは、如何なる困難があろうとも、相互に受け入れあい、ゆるしあえる人間同士の共同体を作り上げて行く者たちとして、復活の主によってこの世界に送り出されたのです。

その彼らの行く手を支えたものは、この世の力によって十字架に追いやられ、葬り去られたイエスを死者の中から復活させ、自分たちの前に立たせてくださった神の全能の力は信じるに値するという確信です。自分たちは、復活の主イエス・キリストによって、イエスを死者の中から復活させた神の全能の力を吹き入れられ、新たないのちを生きる者たちとされたという信仰に基く自覚です。

それゆえに、彼らは、自分たちが生身の肉の体において経験するあらゆる苦しみと悲しみは、イエスの十字架においてそうであったように、神のいのちとの完全な一致に至るための、大いなる希望に向って開かれた、自分たちにとっての十字架の道、神によって与えられた試練なのだと思えることが出来るようになったということを、彼らの全生涯をかけて証する者たちとなったのです。

復活の主によって弟子たちの前に開かれたこのような信仰は、その弟子たちの宣教によって始まり、教会を通して私たちに伝えられ、私たちの心をも開いてくださった復活の主の恵みによって、私たちを生かす信仰のいのちとなったのです。イエス・キリストの復活によってもたらされた、このような信仰に基づく希望を生き、証する使命を私たちも受け継いでいるのです。その使命を生きる力を、今日もこのミサの集いにおいて、私たちの真ん中にいてくださる、私たちが信じる復活の主に願い求めたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高